

# 構文と実用性をつなぐ文法指導： 「総合英語」を足場かけとした「文法指導」

濱田 祐輔

## 1. はじめに

学習者が英語(特に英文法)を学習する際には、「総合英語」と呼ばれる参考書(以下「総合英語」とする)を使用しながらの指導・学習が推奨される。しかし、実態として「総合英語」を隅々まで読み込むことを軸とした指導や学習はあまりされていないのではないだろうか。少なくとも筆者の周りではあまり見受けられず、指導者が「自身の判断のもと作成したプリント」を文法指導の教材としているケースが多い。問題は、その「指導者自身の判断」の結果として一部の文法項目の説明が削除されることにある。文法プリントは簡素なものになってしまい、「形式」・「意味」・「用例」のみが記載され、文法指導が以上の3点のみを踏まえることに留まる。この指導者の簡素なプリントは学習者の「学習姿勢」にも影響を与え得る。結果として、学習者は「総合英語」を脇に置き、その3点のみを意識した暗記中心の学習を英文法学習として認識する。

本来文法指導・文法学習とは「実用性」を帯びなければならない。鈴木(2024)はコミュニケーションに役立つ文法知識は、「形式(form)・意味(meaning)・機能(function)」の3要素が身につけていることが重要と論じている(ここでの「機能(function)」は目的・場面・状況に合わせて、どのような形式を使うかを指す)。この「機能」は必ずしも「用例」から想像できるわけではないため、文法指導においては「機能」まで伝える必要がある。本稿では「機能」まで伝えられることがあまり少ないであろう強調構文、クジラ構文を例に挙げて「実用性」とつながる文法指導の在り方について、「総合英語」の記述を参考にしながら考察する。

## 2. 強調構文における「実用性」の指導

強調構文における「総合英語」での説明には以下のものがある。(下線と番号は筆者による)

○『アースライズ総合英語』(数研出版)の記述

(1) It was John that married Emma in June.  
強調するものを It is [was] と that の間に入れて、残りの部分は語順を変えずに、that のあとにそのまま置く。強調するものを強く発話する。(1)では、「エマと結婚したのは、①(ほかのだれでもなく)ジョンだった」のように、「ジョン」を際立たせている。

○『ジーニアス総合英語第2版』(大修館書店)の記述

(2) It is Tom that Susan called.  
強調構文とは、it is ~ that ...の「~」に強調する語句を入れるものである。例えば、Susan が電話をした相手は②他の誰でもない Tom だと言いたい場合、Susan called Tom. の Tom を「~」に入れて(2)のように言う。

○『デュアルスコープ総合英語』(数研出版)の記述

(3) It was John that [who] met your sister in the library.

「図書館であなたのお姉さんに会ったのが、③(Ken でも Meg でもなく)John だ」と「だれが」会ったのかを強調していることになる。

○『Vision Quest 総合英語 Ultimate 2nd Edition』(啓林館)の記述

(4) It was Chris that I saw in the airport.

(4)では空港で見たのが④ジョンやケンではなく、クリスだったということが強調されています。

一般的な強調構文では情報構造の観点から段落の冒頭や会話を切り出すのに使用されることはあまりないが、「強調したい」とだけ考える学習者は(5)のような文を作ってしまう恐れがある。実際に筆者も高校生が段落の冒頭で強調構文を使用しているのを確認したことがある。

(5) \*Hi! It is Ellen that my name is.  
(Declerck: 1988)

強調構文における「強調する」という言葉の意味について, Swan (2016)は以下の説明をしている。

The emphasis is often contrastive — to contradict a false belief or expectation.

また Declerck (1988)は以下のように述べている。

They (**clefs**) are considered to be structures consisting of a ‘focus’, which represents new information and is heavily stressed and contrastive, and a WH/*that*-clause which represents ‘presupposed’ or ‘old’ information.  
(太字は筆者による)

つまり, 強調構文における「強調」には情報構造がもたらす「contrastive(対比的)」な意味合いが強くある(ここでは強調構文の特徴についてこれ以上は論じない)。このことは上述の「総合英語」においても明示的説明はされていないものの, 下線①～④の通り, 暗示的に示されている。指導者はこの暗示的な箇所を明示的に説明すればよい。つまり, 強調構文が具体的にどのような場面で使用されるべきかを説明することで, 「機能」を示すことができる。筆者は「機能」を示したあとに, SNS や映画のシーン, ニュースや新聞記事など「実例」を多く紹介することで, 学習者に対して「実用性」を伝えるようにしている。

### 3. クジラ構文における「実用性」の指導

(6) A whale is no more a fish than a horse is.

(6)の例文は一般的に「クジラ構文」という名前がよく知られているものであるが, その説明において, 「no が-を表し, more が+を表すので(-)×(+)=(-)によりこの構文は否定を意味する」という俗説を筆者は耳にしたことがある。また, 「実際に使われることは少ない」といった説明も聞いたことがある。このような説明は「実用性」を欠いており,

許すべきではない。「総合英語」には以下のように説明されている。

○『アースライズ総合英語』(数研出版)の記述  
thanのあとに, ⑤明らかに「C≠D」の例を出すことで, 「CがDでないのと同じように, AはBではない」の意味を表し, 「A≠B」を強調する表現になる。

○『ジーニアス総合英語第2版』(大修館書店)の記述

この表現では A is B と C is D が比較されている。⑥ C is D は明らかに正しくないことの極端な例であり, その例に劣らないくらい A is B が正しくないことを A is no more B で表している。ともに否定を表していることと, 意味の重点は「AはBでない」にあることに注意。

○『デュアルスコープ総合英語』(数研出版)の記述  
(6)のように A(クジラ)≠B(魚)を言うために, ⑦明らかに C≠D である例(ここではウマ≠魚)を引き合いに出す表現である。「A=Bの程度がC=Dの程度を越えることはまったくない(A=Bの程度とC=Dの程度に差はない)」が直訳で, 結果的には「AがBでないのはCがDでないのと同様である(同じ程度のものである)」という意味になり, A=B, C=Dの両方を否定することになる。

○『Vision Quest 総合英語 Ultimate 2nd Edition』(啓林館)の記述(太字は筆者による)

(A ... no more ~ than B という表記で)than 以下の⑧ B で明らかに間違っている例を引き合いに出して, Aも「同様にそうではない」ことを表す。Bは否定形ではなく肯定形になることに注意する。

このように, どの「総合英語」においても⑤～⑧のように「C=D」という明らかに正しくない例を引き合いに出し「A≠B」を強調する, という旨の記載があり, クジラ構文が持つレトリックについて明示的に説明している。「機能」という点での指導については同様のレトリックを使用している日本語の実例を示すとわかりやすいだろう。

(7)「君が今度のテストで100点を取るなんて、今から頭上に隕石が降ってくるようなものだ。」

(7)は筆者がよく使う、同様のレトリックを使用した日本語での実例である。このような日本語の実例とともに「比較対象(クジラ構文における than 以下)にどのような内容を設定すると、否定の意味合いが表れるか」を考えさせることで、「機能」を説明すればよい。「機能」がわかると学習者はこの構文を身近なものに感じやすくなり、実用的なものとして認識しやすくなる。また、Quirk et al. (1985)では以下の例を挙げている。

(8) I would no more think of hitting a student than I would a policeman.

(8)では述語動調に一般動詞が使われている。このようにクジラ構文に使われる動調が be 動詞だけではない点も補足し、authentic な「実例」を示すとさらに「実用性」が高まるのではないだろうか。

#### 4. おわりに

Loewen (2020)は、フォーカスオンフォームズ(明示的指導を含む言語形式を重視した指導形式)は、言語形式の中でも特にあまり目立たないものに対して学習者の注意をひく方法の1つであると論じている(太字は筆者による)。特に、目にする頻度があまり高くない文法項目に関しては、指導者が明示的に説明することが学習者にとって有益と言えるはずだが、その説明には「機能」まで含めなければならない。そうでなければ学習者は「実用性」を感じず、対象の文法項目が単なる無機質な「暗記物」となり、退屈なものにしかならない。

学習者にとって身近にある「総合英語」には「機能」を考えるにおいて必要な情報が多く載っている。その「総合英語」の記述を足場かけにしてさらに詳細な説明や実例を補足する形を指導者が取ると、学習者は文法項目の「実用性」を大いに感じるができるだろう。また同時に、「総合英語」をより身近なものに感じ、文法学習に「総合英語」を活用してくれるだろう。そうして自立した学習者への一歩を踏み出してくれるのではないだろうか。

#### 参考文献

- Declerck, R. (1988). *Studies on Copular Sentences, Clefts and Pseudo-Clefts*. Berlin New York: De Gruyter Mouton.
- Loewen, S. (2020). *Introduction to Instructed Second Language Acquisition (2nd Edition)*. New York: Routledge.
- Quirk et al. (1985). *A comprehensive grammar of the English language*. London: Longman.
- Swan, M. (2016). *Practical English Usage (4th edition)*. Oxford University Press.
- 小寺茂明監修. (2016). 『チャート式シリーズ デュアルスコープ総合英語』 数研出版
- 鈴木祐一. (2024). 『あたらしい第二言語習得論—英語指導の思い込みを変える』 研究社
- 中邑光男・山岡憲史・柏野健次. (2022). 『ジーニアス総合英語第2版』 大修館書店
- 野村恵造監修. (2022). 『Vision Quest 総合英語 Ultimate 2nd Edition』 啓林館
- 三村浩一監修. (2021). 『チャート式シリーズ アースライズ総合英語』 数研出版

(大阪桐蔭中学校高等学校 教諭)